

# 住まい、ル新聞

日本ステンレス工業株式会社

発行/日本ステンレス工業株式会社  
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1

電話=0554-22-2500

FAX=0554-22-5234

Vol.195 2015

12月号

## 大月風土記 民話の巻 井上文次郎

六、【お婆さんのとんち】

昔々、ある葛葉の茂る里に来る道に峠がありました。そこに、おじいさんとお婆さんの茶屋が一軒ありました。人々は峠の茶屋と呼んで親しんでおりました。この茶屋には、可愛い女の子が店を手伝っておりました。道もこの一つしかないで、人通りもかなり多く、客もあって結構繁盛しておりました。夜は里の若者達が娘と話をしたり、おいしい葛餅を食べたりするのを楽しみにやってきてにぎやかでした。こうした楽しい日が毎日でしたが、世の中がだんだん進むにつれて、山の麓に広い道路ができて、峠道はさびれ、客足も次第にへってきました。娘は町に嫁いでしまい、きて遊ぶ若者もなくなってきました。山羊や鶏やうさぎなどを放し飼いにしていたのどかな生活は、昨日のようにならなくなりました。

茶屋は日毎貧しくなり、家はかたむき屋根は朽ちてしまうようになりました。新道は相変わらずのにぎやかさだが、峠道は人が獲物を求めて現れるようになった。腹の空った狼は店の近くまできて、様子をうかがうようになってきました。

ある雪まじりの秋雨がしとしと降る晩のこと、おじいさんとお婆あさんは夕食をすませて、囲炉裏の火にあたっていました。雨もりはするし、冷たい風は吹き込んでくるし、火にあたっても寒いくらいでした。お婆あさんは「おじいさんよ」と話しかけました。「この家じゃ狼さんよりむるぞ（雨もり）がこわいね」と狼に聞こえるように大きな声でいいました。おじいさんは「そうだな」と相づちをうちました。それを聞いた狼は「ここらあたりでは、おれが一番強くてあばれんぼうだ」と思っていたのにおれより強いこわいものがこの家にいるのか」といって、一目散に山奥深く逃げ帰ってしまいました。それからは、ここら一

帯は勿論、葛葉の里にも狼は一匹もでなくなり、平和の毎日が続いたという事です。

七、【ふもとやまのうわばみ（大蛇）】

昔、麓山に、大石忠右衛門という庄屋さんがいました。谷村の代官所へ村の相談事に行ったり、秋になると村の納め物に行ったりして、村の人の世話をしていました。村の人たちはよく働き、仲良く暮らしていました。そんな村の人の一番の楽しみは、谷村に住む「たのきゅう」さんが村に来て、一人芝居をしてくれる事でした。ある日、庄屋さんが、「明日、たのきゅうさんが芝居しに来てくれるから、うらがへ早くから集まって、りょう家中じゅうで」と言いました。みんなは、首を長くして待っていたので、さあ大騒ぎ。村じゅうみんなで一日がかりでご馳走を作って、みんなそろって庄屋さんのいえへ上がっていきま

は、キツネやタヌキなどの動物のお面をかぶって踊りを踊ったり、歌を歌ったりしながら芝居をみせてくれました。子供達は大喜びでした。そしてまた、たのきゅうさんが話してくる世間話にみんな楽しんで時を過ごしたものでした。

秋の日は短いので、たのきゅうさんが気がついた時には、もうお日様が向山に隠れることでした。「あれ、困ったものだ。みなさんかんにんしてくりょう。上和田のし

麓山を越える道は、とても急な山道でした。たのきゅうさんは、一日一人芝居をした疲れが出た上、お面のほかにお酒の瓶も背負っていたので、思うように足が運びませんでした。それで、山道の途中でもう真っ暗になってしまったのです。

幸い月が出て、その月明りをたよりに頂上の方を見ると、炭焼き小屋が見えました。「ああ、よかったです。こりゃあ天の助けだ。今夜はあすこへ泊まらせてもらやべえ。」と小屋までやっとの事

が人間に化けたのか。タヌキは臭くてまずいちゃうけんどうよう、おりゃあまずくても臭くても、ひゃあ腹が減って死にそうだから、おみやあを食ちもうだ。」

「うわばみさん、おりゃあ何日も雨がふらにゃあから体が臭くてまずい。ここにすげえうまい酒があるから、この酒を飲んでください。」  
「うわばみは、空きっ腹にごくごくと一気に飲んで、「こんなうみやあ酒、久しぶりで飲んだ。」  
「おみやあは本当にタヌキだら化けてみせろ。」  
「はいはい、じゃあちよっと待って下さい。」  
「はい、これがキツネです。」  
「全くおみやあは上手だなあ。おみやあは頃を経たタヌキずら。」  
「はい。おりゃあ年をとって、肉も硬い、皮も硬い。でったいにまずいです。」

裏面に続く





こんなやりとりをして、酔っぱらったうわばみは、つい、「おりゃあよう、人間の若い娘が一番好きだ。だけんどうよう、嫌いなものは煙草の脂だ。煙草の脂がからんで、体がとけちまうだあ。」

退治するなら、いたのうちだあ。と、それぞれの家に行つて煙草の葉を集め、まきと庄屋さんの家にあつた大きな団扇もよって、うわばみの住む炭焼き小屋に登つて行きました。

村人たちは、「おうおう、とうとう死んだ。これで安心だ。」と、山を下りて行きました。うわばみは、「よくも俺をこんな目に遭わせたな。タヌキ、敵討ちに来た。俺と同じ苦しい目に遭わせてやるからな。」

もんがズルズル下りてくるぞ。ありゃああんずら。「ありゃあ、うわばみじゃあにやあか。みんなで敵を討つべえ。」

めて、うわばみの頭と骨をオモレ下の河原へ沈めて、丁寧に清めてやりました。そして、お経を唱える

りまけました。この声を聞いたうわばみは、「ああ、やっと恩を返す時が来た。」と、言つて雲を引き寄せ、瀬戸の山や、村々の上に雨を降らしてくれました。

お釜石 お釜石と呼ばれている大きな石の上で、オモレの隠居のおじいさんがお経を唱え、村人たちは、「あーめ立った、降り立った。」

